

K240.8

1

中等國語三

文部省

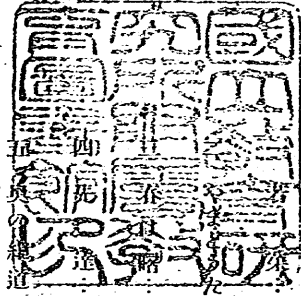
文部省調查會發行課寄贈

(前) ¥ .50

(11)

目録

國文篇



六 固有の偉大さ

十四

昭和二十一年三月二十日印刷 同日蒸刻印刷
昭和二十一年三月三十日發行 同日蒸刻發行

(昭和二十一年三月三十日 文部省検査済)

著作権所有 著者 文部省

東京都神田區春日町三丁目

中等學校教科書株式會社

代表者 龜井 實 雄

東京都牛込區市谷町一丁目十二番地

大日本印刷株式會社

代表者 佐久間 長吉郎

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Mar. 26, 1946)

國文篇



菜

古今和歌集

よみ人知らず

とふ火の野守いでてみよ今いくかあり

工若菜摘みてむ

わが宿の池の藤波さきにけり山ほととぎすいつ

か來鳴かむ

はちすの露を見て詠める 借 正 遍 昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を

玉とあさむく

惟喬親王の許にまかりかよひけるを、かしらお

ろして小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶ

らけむとてまかりたりけるに、比叡の山の麓な

りければ雪いと深かりけり。しひてかの室にま

かりいたりてをがみけるに、つれづれとして

ともの悲しくて歸りまうでて詠みておくりけ

在原 業平

國文篇

忘れては夢かと思ひきや雪ふみわけて
君を見むとは

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿

らでほどへてのちにいたれりければ、かの家の

あるしがくさだかになむ宿りはあるといひ出し

て侍りければ、そこに立てりける梅の花を折り

て詠める 紀 貫 之

人はいさ心もしらずふるさは花をむかしの香
にほひける

歌奉れと仰せられし時に詠みて奉れる

櫻花咲きにけらしなあしひきの山のかひより見

ゆる白雲

池のほとりにて紅葉の散るを詠める

凡河内 躬 恒

風ふけばおつるもみぢ葉水さよみ散らぬ影さへ
底に見えつゝ

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける

時に四季の繪がける後の屏風にかきたりける歌

代

住の江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつ白波

是真親王の家の歌合の歌 紀 友 則

露ながら折りてかささむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

王 生 忠 岑

みよしの山の白雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ

題知らず

よみ人知らず

わたつみの濱のまさごを敷へつゝ君が千年のありかずにせむ

とりものの歌

み山には叢ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

二 やまとうた 紀 貫 之

やまとうたは、人の心をなねとして、よろづの言の

葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり。花に鳴くうぐひす、水にすむかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

二

今、すべらぎの天の下知らしめすこと、四つの時、九かへりになんなりぬる。あまねき御慈しみの波、やしませのほかまで流れ、ひろき御恵みのかげ、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとを聞しめすいとま、もろ／＼の事をすて給はぬあまりに、いにしへのことをも忘れじ、ふりにしことをも興し給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則・御書所前紀貫之・前甲斐少目凡河内躬恆・右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなん。それが中に、梅をかざすより始めて、ほと／＼ぎすを聞き、もみちを折り、雪を見るに

至るまで、又、鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、逢坂山に到りて手向けを祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさ／＼の歌をなん撰ばせ給ひける。總べて千歌、二十卷、名づけて古今和歌集といふ。

三

かくこのたび集め撰ばれて、山下水の絶えず、濱の真砂の数多く積りぬれば、今は飛鳥川の瀬になるうらみも聞えず、さ／＼れ石の巖となる喜びのみぞあるべき。それ、まろら、ことは春の花匂ひ少くして、空しき名のみ秋の夜の長きをかこてれば、かつは人の耳におそり、かつは歌の心にはちて思へど、たなびく雲のたちぬ、鳴く鹿のおきふしは、貫之らがこの世に同じく生まれて、この事の時にあへるをなん喜びぬる。人麻呂亡くなりたれど、歌のこととまされるかな。たとひ、時移り、事去り、樂しび悲しび行き交ふとも、この歌のもじ、青柳の絲絶えず、松の葉の散り失せずして、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとまされらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらん人

三 春は曙 枕 草 子

春は曙。やう／＼白くなり行く山ぎは少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入り柴てて、風の音蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、又、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

正月十日、空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに、日はいとけさやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、菖蒲などいふものの、土もうるはしうなほからぬに、桃の木若だちて、いとしもとがちに差し出でたる、片の方は青く、いま片の方は濃くつや／＼かにて、蘇枋のやうに見えたるに、細やかなる童の狩衣はかけやりなどして、髪はうるはしきが登りたれば、又、紅梅の衣白きなど、引きはこえたる男児、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「われによき木切りて、いで。」など乞ふに、又、髪をかしげなるわらはべの相ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよき打ち着たる、三四人、「卵毬の木のよからん切りておろせ。こゝに看すぞ。」など言ひて、おろしたれば、走り交ひ、取りわき、「われに多く。」など言ふこそをかしけれ。

黒き袴着たる男走り来て乞ふに、「待て。」など言へば、木のもとに寄りて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつぎてをるもをかし。梅などのなりた

る折もさやうにぞあるかし。

三 四月の晦日に、長谷寺に詣つとて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかき据ゑて行くに、菖蒲・菰などの、末短く見えしを取らせなれば、いと長かりけり。菰積みたる舟のありきこそ、いみじうをかしかりしか。「高瀬の淀に」は、これを詠みけるなめりと見えし。二日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲刈るとて笠のいと小さきを着て、脛いと高き男・童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

四 五月ばかり山里にありく、いみじくをかし。澤水もげにたゞいと青く見え渡るに、上はつれなく草生ひ茂りたるを、長々とたゞさまに行けば、下はえならざりける水の深うはあらねど、人の歩むにつけてとほしり上げたる、いとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて、車の屋形に入るを、急ぎてとらへて折らんと思

ふに、ふとはづれて過ぎぬるもくちをし。蓋の車に押しひしがれたるが、輪の舞ひ立ちたるに、近うかゝへたる香もいとをかし。

五

九月ばかり、夜一夜降り明かしたる雨の、今朝はやみて、朝日のはなやかにさしたるに、前栽の菊の露、こぼるゝばかり濡れかゝりたるも、いとをかし。透垣・縁女・すゝきなどの上にかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りて、ところどころに絲も絶えさまに雨のかゝりたるが、白き玉を貫ぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

少し日隠けぬれば、萩などのいと重げなりつるに、露の落つるに枝打ち動きて、人も手觸れぬに、ふとかみさまへ上りたる、いみじうをかしと言ひたる、こと人の心地にはつゆをかしからじと思ふこそ、又をかしけれ。

六

月のいと明かきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

七

降るものは、雪。霰。霰はにくけれど、雪の真白にてまじりたる、をかし。雪は、楡皮葺きいとめでたし。少し消えがたになりたるほど。又、いと多うは降らぬが、互の目ごとに入りて、黒う真白に見えたる、いとをかし。時雨・霰は板屋。霜も板屋・庭。

八

にくきもの、急ぐことある折に、長言する客人。あなづらはしき人ならば、「後に。」など言ひても追ひやりつべけれども、さすがに心恥づかしき人、いとにくし。硯に髪の入りに磨られたる。又、墨の中に石こもりて、きしくときしみたる。俄かにわづらふ人のあるに、験者求むるに、例ある所にはあちで、ほかにある草ねありくほどに、待ち遠に久しきを、からうじて

得ちつけて、喜びながら加持せざるに、この頃、ものけに押しにけるにや、屏るまゝに即ちねぶり聲になりたる、いとにくし。

なんでふ事なき人の、すゞるにえがちにもいなる言ひたる。火桶・炭櫃などに手の裏打ち返し、鑿押し延べなどしてあぶりある者。いつかは、若やかなる人などの、さはしたりし。老いばみ、うたてある者こそ、火桶のはたに足をさへもたげて、もの言ふまゝに押しすりなどもすらめ。

もの羨みし、身の上歎き、人の上言ひ、つゆばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、言ひ知らせぬをば怨じそしり、又、僅かに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらべ言ふもいとにくし。もの聞かんと思ふほどに泣くもご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。

ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ。さしめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらんといとにくし。わが乗りたるは、その

侍りぬ。開きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そ

も、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。

ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、

山までは見ず。」とを言ひける。

二

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ、うち／＼よく習ひ得て差し出でたらんこそ、いと心にくからめと常に言ふめれど、かく言ふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたはほなるより上手の中に入りて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性その骨なれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは遂に上手の位に至り、徳だけ、人にゆるされて、並びなき名を得ることなり。天下の物の上手といへども、初めは不堪の開えもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道の修正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、

四 文 篇

車のまぎへにくし。

物語などするに、差し出でて、われ一人さいまくる者。總べて、差し出では、童も大人もいとにくし。あからさまに來たる子供・わらはべをらうたがりて、をかき物など取らするに、ならひて常に來て居入りて、調度や打ち散らしぬる、にくし。今参りの差し感えて、物知り顔に、教へやうなること言ひ、後見たる、いとにくし。

童もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにするよ。又、犬のもろ聲に長々と鳴き上げたる、まが／＼しくにくし。

四 先

達

徒 然 草

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて、或る時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。

さて、かたへの人に會ひて、「年來思ひつること果し

諸道變るべからず。

四

貝を覆ふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖の陰、膝の下まで目を配る間に、前なるをば人に覆はれぬ。よく覆ふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きはかり覆ふやうなれど、多く覆ふなり。其盤の隅に石を立ててはじくに、向かひなる石をまぼりてはじくは當らず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじりめを直ぐにはじけば、立てたる石必ず當る。

よろづの事、ほかに向きて求むべからず。たゞ、もとを正しくすべし。清獻公が言葉に、「好事を行じて前程を問ふことなかれ。」といへり。世をたまたん道もかくや侍らん。内をつゝします、軽くほしきまゝにしてみだりなれば、遠き國必ず背く時、始めて謀を求む。「風に當り濡に臥して、病を神靈に訴ふるは愚かなる人なり。」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の憂ひをやめ、恵みを施し、道を正しくせば、その化遠

く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして徳をしくにはじかざりき。

四

或る者、子を法師になして、「學問して、因果の理を
も知り、説經などして世わたるたづきともせよ。」と言
ひければ、教へのまゝに説經師にならんために、先づ
馬に乗り習ひけり。輿・車はまたぬ身の、導師に請ぜ
られん時、馬など迎へにまこせたらんに、桃尻にて落
ちなんは、心憂かるべしと思ひけり。次に、佛事の後、
酒などすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは、
檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけ
り。二つのわざ、やう／＼さかひに入りければ、いよ
いよよくしたく覺えて嗜みけるほどに、説經習ふべき
隙なくて年寄りけり。

この法師のみにもあらず、世間の人、なべてこの事
あり。若きほどは諸事につけて、身を立て、大きな道
道をも成じ、能をもつき、學問をもせんと、行く末久
しくあらます事ども、心には掛けながら、世をのどか

道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着き
たりとも、西山に行きてその益まさるべきことを思ひ
得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝま
で來着きぬれば、この事をば先づ言ひてん、日をさゝ
ぬことなれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひ立ため
と思ふ故に、一時の懈怠即ち一生の懈怠となる。これ
を恐るべし。

一事を必ずなさんと思はば、他の事のやぶるゝをも
いたむべからず。人の志ざけりをも恥づべからず。萬
事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあま
たありける中にて、或る者、「ますほのすゝき、まそほ
のすゝきなどいふ事あり。わたのべの理、この事を傳
へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけ
るが、聞きて、雨の降りけるに、「簷笠やある、貸し給
へ。かのすゝきの事習ひに、わかのべの理のがり訪ね
罷らん。」と言ひけるを、「餘りにもの騒がし。雨止み
てこそ。」と人の言ひければ、「無下のことをも仰せら
るゝものかな。人の命は雨の霑れ間をも待つものが

に思ひて、打ち怠りつゝ、先づ差し當りたる目の前の
事にのみ紛れで月日を送れば、事ごとなすことなくし
て身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひじやう
に身をもたず、悔ゆれども取り返さるゝ齡ならねば、
走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば、一生のうちにはむねとあらまほしからん事の
うちに、いづれかまさるとよく思ひ比べて、第一の事
を案じ定めて、そのほかは思ひ捨てて、一事を勵むべ
し。一日のうち一時のうちにも、あまたの事の來たら
ん中に、少しも益のまさらん事をいとなみて、そのほ
かをば打ち捨てて、大事を急ぐべきなり。いづ方をも
捨てじと心に取り持ちては、一事も成るべからず。例
へば、碁を打つ人、一手もいかづらにせず、人に先立
ちて、小を捨てて大に就くが如し。それにとりて、三つ
の石を捨てて十の石に就くことは易し。十を捨てて十
一に就くことは難し。一つなりともまさらん方へこそ
就くべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くま
さらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも
取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき

は。われも死に、聖も失せなば、尋ね開きてんや。」と
て、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりて申し傳へ
たるこそ、ゆゑしくありがたう覺ゆれ。「放き時は則ち
功あり。」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。このすゝ
きをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思
ふべかりける。

五

一道に携る人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あは
れ、わが道ならましかば、かくよそに見侍らしものを。」
と言ひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわ
ろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨ましく覺えば、「あな、
羨まし。などか習はざりけん。」と言ひてありなん。わ
が智を取り出でて人に争ふは、角あるものの角をかた
ぶけ、牙あるものの牙を噛み出す類ひなり。

人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他
にまさることのあるは大きな失なり。品の高さにて
も、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人に
まされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言は

頼ども、内心にそこばくの咎あり。つゝしみてこれを忘るべし。をこにも見え、人にも言ひ消たれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇ることなし。

六

平宣時朝臣、老いの後、昔語り、「最明寺入道。或る宵の間によばるゝことありしに、『やがて。』と申しながら、直垂のなくて、とかくせしほとに、また使來たりて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様なりとも、とく。』とありしかば、萎えたる直垂、うちうちまゝにて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて、もて出でて、『この酒を獨りたうべんがさうくしければ、申しつるなり。さかなこそなけれ。人は静まりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ。』とありしかば、紙燭さして、くまなくを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これを求め得て候。』と申ししかば、『事足り

光をさされるものから、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睦まじき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上れば、前途三千里の思ひ胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまでと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚、たゞかりそめに思ひ立ちて、吳天に白髪の恨みを重ねといへども、耳にふれて未だ目に見ぬさかひ、もし生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。

瘦骨の肩に掛れる物、先づ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・蓑・筆の類ひ、あるはさがたき籠などしたるは、さすがに打ち捨てがたくて、路次の煩ひとなれるこそわ

なん。』とて、心よく數獻に及びて典に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか。』と申されき。

五 奥の細道 松尾芭蕉

門 出

月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を住みかたす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゝる神のものにつきて心をくるはせ、道祖神の指きにあひて取る物手につかず、股引の破れをつゞり、笠の緒附け替へて、三里に茶搦うるより、松島の月先づ心に懸りて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、草の戸も住み替る代を離の家

表八句を庵の柱に掛けおく。

彌生も末の七日、曙の空朦々として、月は右明にて

白 河

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしものことわりなり。中にもこの關は三關の一にして、風騷の人心をとどむ。秋風を耳に残じ、紅葉を面影にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲き添ひて、雪にもこゆる心地をす。古人冠を正し、衣裳を改めしことなど、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴れ着かな 會 良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山連なる。かげ沼といふ所を行くに、今日は空曇りて物影映らず。須賀川の驛に等船といふ者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白河の關いかに越えつるやと問ふ。長途の苦しみ身心疲れ、且つは風景に魂奪はれ、懐舊に腸を断ちて、はかくしう思ひめぐらさず。

風流の初めやあくの田植うた

抑、ことさらにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたふ。島々の数を盡くして、峙つものは天をさし、臥すものは波に腹ばふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に分れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹き撓めて、屈曲おのづからためたるが如し。その氣色蒼然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天上、いづれの人か筆を振るひ言葉を盡くさん。雄島が磯は、地続きて海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木陰に世をいと人人も稀々見え侍りて、落穂・松箆など打ちけぶりたる草の庵靜かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立ち寄るほどに、月海に映りて晝の眺めまた改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寝すること、怪し

きまで妙なる心地はせらるれ。
松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良
予は目を閉ちて眠らんとして寝ねられず。舊庵を別る時、素堂、松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。且つ、杉風・濁子が發句あり。

平泉

十二日平泉と志し、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兔・菟菟の行き交ふ道そこもわがず、遂に道踏みたがへて、石巻といふ溪に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて竈の煙立ち積けたり。思ひかけずかゝる所にも來たれるかなと、宿借らんとすれど、更に宿賃す人なし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り、尾ぶもの牧、眞野の萱原などよを目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺

ゆ。

三代の祭壇一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。先づ、高館に登れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが舊跡は、衣が關を隔てて南部口を差し堅め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打ち敷きて時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡
卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風にやぶれ、黄金の柱箱雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新たに圍んで、莖を覆うて風雨を凌ぐ。しばし千載の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にして、殊に清閑の地なり。一見すべき山人々の勸むるによりて、尾花澤より取つて返し、その間七里ばかりなり。日未だ暮れず。麓の坊に宿借りおきて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり土石老いて、苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ちて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寥として心澄み行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。翡翠・隼などいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟を下す。これに稻積みたるをや稻舟といふならし。白絲の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水漲つて舟危し。

五月雨をまつめて早し最上川

象 潟

江山水陸の風光敷を盡くして、今象潟に方寸をせむ。

酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏み、その際十里。日影や、かたよく頃、潮風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、海人の苦屋に膝を入れて、雨の霽るゝを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。先づ、能因島に舟を寄せ、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟を上げば、花の上漕くと詠まれし櫻の古い木、西行法師の記念を残す。寺を干満珠寺といふ。

この寺の方丈に坐して簾を卷けば、風景一眼のうちを盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はひやゝの關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて波打ち入る所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、而影松島に通ひて又異なり。松

島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を稽ますに似たり。

汐越や鶴脛濡れて海涼し

六 固有の偉大さ

大地震以後、東京に高層建築の殖えて行つた速度はかなり早かつたといつてよい。毎日その進行を側で見てみた人たちは、それほどにも感じなかつたであらうが、地方から稀に上京する者には、それが顯著に感ぜられた。おひ／＼高層建築が立ち並ぶに従つて、部分的には堂々とした通りも出来上つて来た。全體としては、恐しく亂雑な、半出来の町でありながら、しかも、どこかに力を感じさせる不思議な都會が出現したのである。

この復興の経過の間に、自分を非常に驚かせたものが一つある。二三年前の初夏、久しぶりに上京して、東京驛から丸の内の高層建築街を抜けて、壕側へ出た時であつた。壕に面して新しい高層建築が立ち揃つてゐる。こゝがあの荒れ果てた三菱が原であつた時分

中等國語三

文部省

文部省調査費爲刊行課寄贈

(中) Y 1.80

(11)